

Jūn zǐ móu dào bù móu shí
君子謀道不謀食君子は道を謀りて、食を謀らず（衛霊公第十五）

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



孔子は『論語』の中で君子のあり方について、幾度となく語っています。『論語』は君子の心得を説いたものと言っても過言ではないくらいです。この表題の「君子は道を謀りて、食を謀らず」もその一つです。

「道を謀る」とは、道義心を追い求めることです。「食を謀らず」とは、生活の糧を追い求めないということです。したがってここの意味は、世の指導者たるもの、道義心を養うことが第一で、自分の生活は二の次にすべきだということになります。

ここで肝心なことは、「道」とは何かということです。

道義、道徳、道理等々、「道」という文字にはいろいろな意味が込められていますが、孔子にとって「道」とは、今日私たちがイメージするような内面的、抽象的な意味合いばかりでは必ずしもありませんでした。孔子の説く「道」とは、現実の政治や社会の在り方と直結するものでした。孔子はまた「道之不行，已知之矣（Dào zhī bù xíng, yǐ zhī zhī yǐ）」（道の行われざるは、已に之を知れり）（微子第十八）とも言っています。社会が乱れ、世の道義が廃れたことを、自分はよく認識している、という意味です。だからこれを正さなければならない。そのためには、指導的な地位にある者が率先して道義を実践し、正しい世の在り方を追求しなければならない。そして、それができる人材を育てることを、晩年の孔子は自らの使命としていました。「朝聞道，夕死可矣（Zhāo wén dào, xī sǐ kě yǐ）」（里仁第四）（朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり）（里仁第四）。世に道義が行われるようになるなら、その日のうちに死んでもよい、という言葉もその

心境を表わしたものと見るすることができます。

さて、表題に続く言葉は次のようになっています。「耕也，餒在其中。学也，禄在其中（Gēng yě, nǎi zài qí zhōng. Xué yě, lù zài qí zhōng）」（耕せば、餓その中に在り。学べば、禄その中に在り）。「耕」とは田畑を耕すこと、農業に従事することです。「餓」とは飢えることです。「学」とは学ぶこと。ここでは学問をして支配階級の仲間入りをすることです。「禄」とは食禄、俸給のことです。「其の中に在り」とは、自然にそうなるという意味です。したがって、ここの意味は、農民は、いくら農業に励んでも自然の成り行きとして災害や飢饉から免れることはできない。だから飢えは避けられない。しかし学問をして支配階級の一員になれば、何が起こっても多かれ少なかれ俸給にありつくことができるので、飢えることはない、ということなのです。

だからと言って孔子は、学問に励んで高い地位につくことを奨励しているわけではありません。文はさらに続きます。「君子忧道，不忧贫（Jūn zǐ yōu dào, bù yōu pín）」（君子は道を憂えて、貧を憂えず）。だから世の指導者は、自分の行為が道義にかなっているかどうかを常に心がけるのであって、自分が貧乏であるかどうかは気にしないものである、と。

飢えに苦しむ農民からの租税によって、指導者は生計を立てることができる。だから指導者は道義を重んじなければならない。そしてその道義は、仲間内だけものではなく、農民にまで及ぶものでなければならない。孔子の目指した「道」とはそういうものでした。

（わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師）